群教セ	F09 － 01
	平16.224集

互いに支え合える温かな人間関係づくり

―「ほっとルーム」の機能を活用した異学年交流の活動を通して ―

特別研修員　　村上　典代（前橋市立清里小学校）

《研究の概要》

本研究は、不登校を未然に防ぐために人間関係づくりの場の機能をもった「ほっとルーム」を設置し、異学年交流の活動を通して、互いに支え合える温かな人間関係を育てることをねらいとした。異学年交流の活動のねらいを明確にし、活動ごとに振り返りを行い、自分や友だちのよさ、上級生の思いやりや優しさに気づき、自己肯定感が高まり、互いに支え合える温かな人間関係が生まれると考え取り組んだものである。
【キーワード：教育相談　異学年交流　自己肯定感　ほっとルーム】

Ⅰ　主題設定の理由

本校は、現在不登校の児童はいない。けれども、「どの子にも起こりうる」という認識が常に必要である。不登校を未然に防ぐ予防的・開発的な教育相談が重要である。また、非行やいじめ等生徒指導上の諸問題を生まないための、児童にとって魅力ある学校でなければならない。児童が主体的に登校し、自分らしさを発揮して活動ができるためには、人との出会いの中で、様々なふれあいを通して、一人一人が認め合い、支え合い、育ち合える人間関係が育まれなければならない。

本校の特色の一つとして、全学年の縦割班による異学年交流があげられる。全校児童 282 名を 12 班の縦割り班に編成し、６年生のリーダーを中心に活動が計画され実践されている。この「里の子活動」は、児童が大変楽しみにしている活動である。この異学年交流は、長年の取組の中で、「高学年の子が低学年の面倒をよく見てくれる」成果をあげてきている。しかし、活動には楽しく取り組んでいるが、高学年のリーダーシップがやや足りなかったり、低学年児童には、自分勝手なわがままな言動が見られたり、また、異学年交流のねらいをしっかりつかんでいないと思われる児童がいたりといった課題があげられる。

担任している２年生は、これまでに「里の子活動」を中心にした様々な学校生活の中で、多くの友だちとのふれあいを経験してきている。中には、集団にうまく適応できない児童や、友だちとのコミュニケーションがうまくとれず粗暴な行動となってしまう児童が見られるので、ピア・サポートを取り入れたトレーニングを積み、互いに支え合える温かな人間関係の育成を図っていく必要がある。

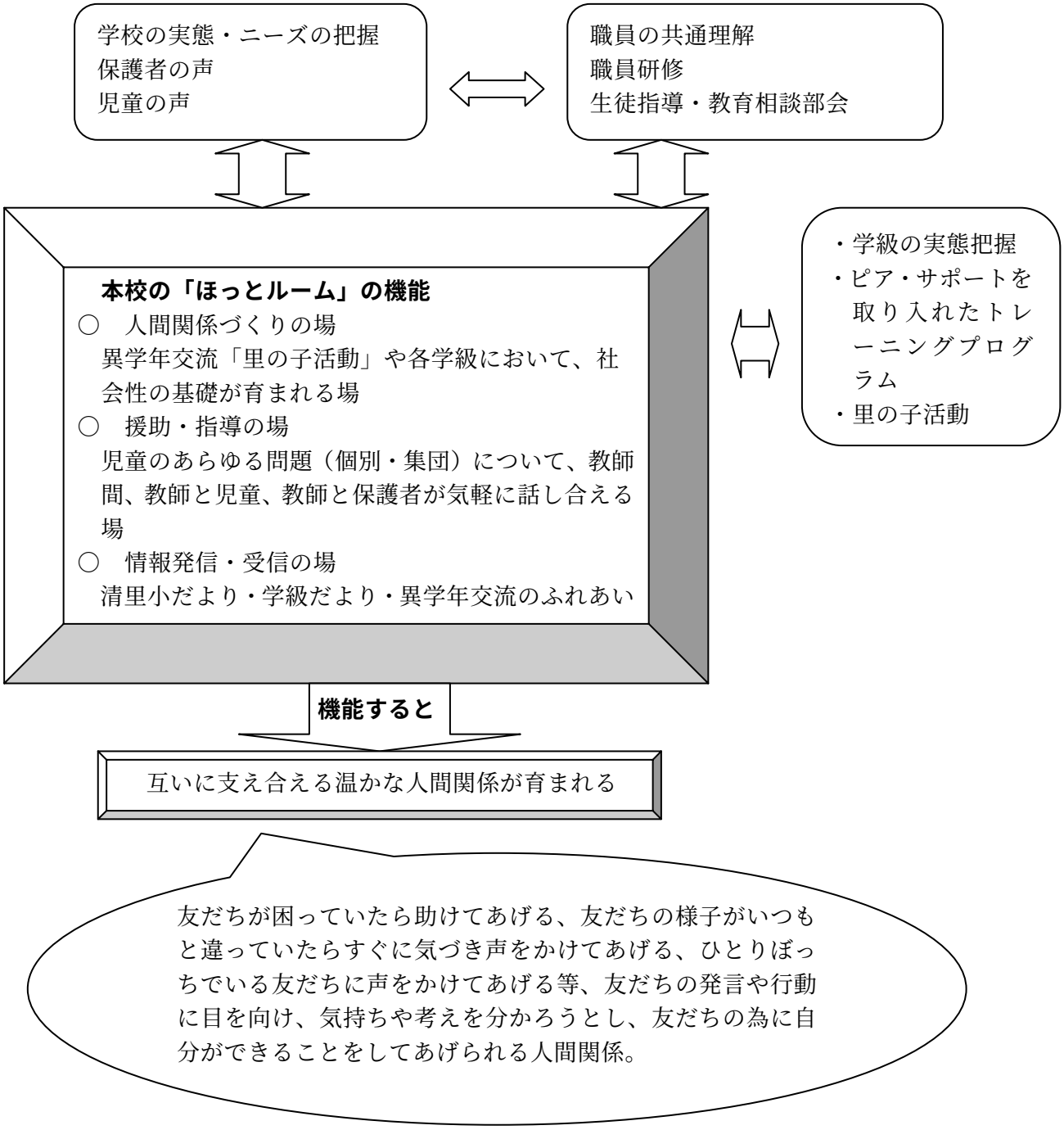
そこで、本校に不登校を未然に防ぐための人間関係づくりの機能をもった「ほっとルーム」を設置する。異学年交流の活動のよさやねらいを共通理解し、活動ごとの振り返りを通して、対人関係を支えるさまざまな感情や能力を育むことにより、「互いに支え合える温かな人間関係」を育てていきたいと考え、本主題を設定した。

II　研究のねらい

不登校を未然に防ぐための温かな人間関係づくりの場としての機能をもった「ほっとルーム」を設置し、異学年交流を通して、児童一人一人が自分らしさを発揮できるよう支援することにより、互いに支え合える温かな人間関係を育てる。

III 研究の内容および方法

1　本校の「ほっとルーム」



２　異学年交流「里の子活動」のよさとは

近隣社会のきずなの弱体化や少子化等、地域や家庭が変化した結果、子どもたちが、対人関係的な能力を自然に身につける機会が減り、人間関係づくりが苦手な子どもも増えている。「上級生が下級生のお世話をする」という異学年交流の活動は、子ども同士のかかわり合いの中で、社会性の基礎が育成できると考える。「里の子活動」において、児童一人一人が自分の立場や役割を理解し、目的意識を持って異学年交流に参加することは、自分が学級や学校の大切な一員としての自覚を深めることにつながる。また、協力することの必要性や大切さをおのずと実感し、協調性や思いやりが高まると考える。活動ごとに振り返りを行い、児童の「気づき」を大切にしながら次の活動を進める。教師がねらいを共通理解し指導することで、子どもたちが自信や自己肯定感がもてるようになり、互いに支え合える温かな人間関係を育成することができ、不登校問題の予防的・開発的な取組につながると考える。

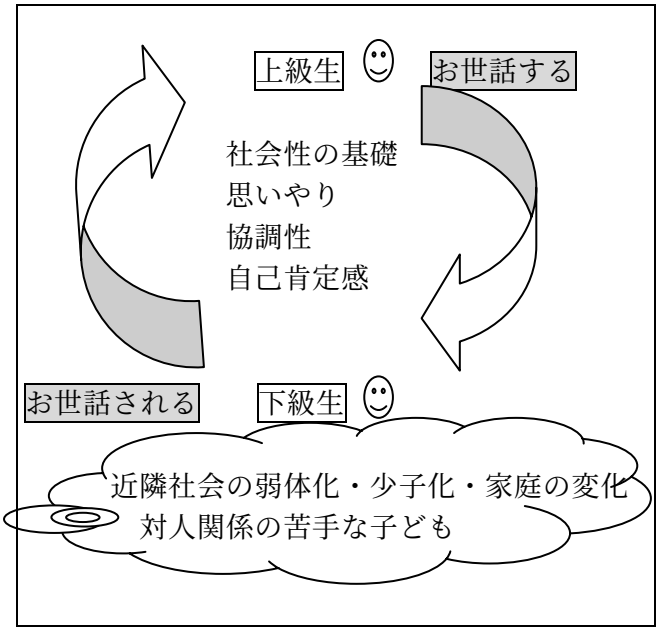


図1　異学年交流（里の子活動）のよさ

３　研究の対象及び実施計画

(1)　異学年交流「里の子活動」班の組織編成（１学年～６学年）と活動内容

- 児童の自主性を大切にし、高学年の児童が低学年の児童に対してリーダーシップを発揮しながら楽しく活動できるような全校縦割り班を編成する。
- 班編成に際しては、リーダー性（特に高学年）、個別に配慮を要する児童、運動能力などを考慮して決める。
- 運動会では、里の子班を基本単位として４つの班が合併して団を編成し、競技したり応援したりする。
- 班の数は 12 班とし、より多くの高学年児童がリーダーとして活躍できるようにする。
- 各班の６年生から班長、５・６年生から副班長を各１名選出する。

異学年交流におけるめざす児童像

低学年	高学年や中学年の指示をよく聞き、協力して活動する子
中学年	高学年に協力し、低学年の接し方を高学年から学び、自分のできる範囲で低学年にアドバイスできる子
高学年	効果的に活動できるように他の学年にアドバイスしながら、リーダーとして集団をまとめられる子

(2)　実施計画

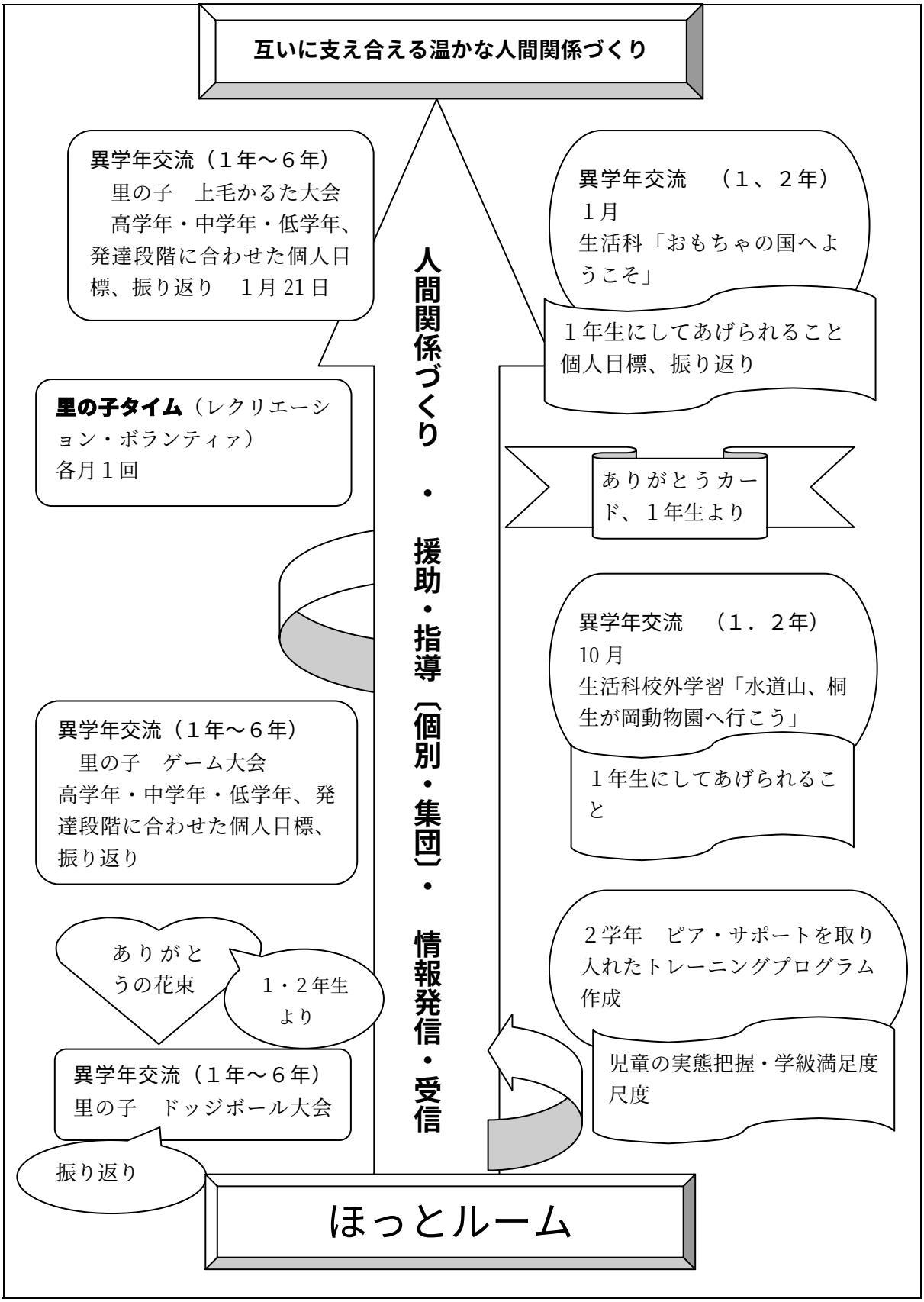


図2　本校の「ほっとルーム」

４　実践の概要

(1)　人間関係づくりの場

ア　里の子ゲーム大会　10／29　５・６校時

春のドッジボール大会では､里の子班のリーダーとしての自覚に欠け、「負けて悔しかった。」「勝ちたかった。」等、自分たちの勝敗に一喜一憂する振り返りがみられた。

そこで、今回のゲーム大会において、職員間での共通理解として、異学年交流のねらいを再確認し､発達段階にあわせた自分の立場をしっかり意識させ､自分のできる目標をつかませて、ゲーム大会に臨ませ、振り返りをさせたところ、次の意欲につなげられた。

６年生児童の振り返り

- とっても楽しいゲーム大会だった。低学年や中学年の子も言うことをきちんと聞いてくれた。あと４班を回れなかったので、もう少し時間がほしかった。係りの仕事でも、５・６年生はもちろん、４年生までがんばってくれた。そして、みんなで協力できたので良かった。
- 協力できて良かった。仕事の交代も時間通りにできた。低学年・中学年・高学年も楽しめた。最後のゲーム大会としてとても楽しめた。１つ１つのゲームが良かった。悪かったことは、時間がなかった。自分自身、班長だったので、みんなをまとめることができて良かった。

６年生の児童の作文より

- 私は、里の子ゲーム大会で一番大変だったことは、低学年のめんどうをみることです。私は、小さい子が苦手です。なので、最初、私だけで低学年のめんどうをちゃんと見ながら他の班のゲームを回れるか心配でした。そして当日、やっぱり１年生が「あっちへいきたい。」などとバラバラに言ってきました。でも、だんだん私の言うことを聞いてくれるようになりました。４年生や５年生も協力してくれたので私たちは５つの班のゲームが回れました。後半の人と交代の時、少し行くのが遅くなってしまったので、もう少し時間がほしかったです。私は、この最後の里の子ゲーム大会が大変だったけど一番がんばれたと思います。苦手だったこともできたし、６年生としてリーダーシップもとれたと思います。これからも、この楽しい行事は続いてほしいです。

５・６年生へ

- やりたいゲームに連れて行ってくれてありがとう。
- ゲームのやり方を教えてくれてありがとう。
- 迷子にならないように、教えてくれてありがとう。
- 楽しかったよ。ありがとう。
- 楽しかったよ。また、したいな。
- 迎えにきてくれてありがとう。
- 楽しいゲームがいっぱいだったよ。

資料1「ありがとうの花束」1･2年生より

イ　２学年の児童の実態に合わせ、トレーニングを行う。
学級活動（短学活も含む）や道徳の時間で行った概要は、以下の通りである。

表１ トレーニングの実践概要（主な活動について記す）

		トレーニングのねらい・内容	学びの場	児童の反応・変容・評価
６月から７月	自己理解・他者理解	＜いいとこさがし＞ 友達のよさを見つけてほめる。友達が見つけてくれた自分のよさを知り、受け入れられたことの喜びを味わう。	各教科・道徳の学習や生活場面において ・休み時間	「大丈夫？」と言ってあげただけでほめられた。児童のよさをクラスに返してあげることでふれあいが広がる。継続が必要。友達同士のトラブルが少なくなる。トラブルがあってもお互いにすぐに悪かった点を謝れる。
		＜ほめほめ大会＞ 朝の会の５分間で行う。席を立ち出会った友達と握手を交わし、じゃんけんをして勝った方から友達をほめる。	各教科・道徳の学習や生活場面において ・体育の器械運動 ・音読	友達とふれあうことに最初は抵抗を示していたが、慣れると笑顔で握手を交わす。いつもなかなか話をしない友達ともふれあえることを楽しんでいた。継続が必要。友達の発言を拍手で賞賛できるようになる。優しさが生まれる。
９月から11月	他者とのかかわり方の練習	＜ふわふわ言葉とチクチク言葉＞ 相手を優しい気持ちにする言葉と悲しい気持ちにする言葉があることを知り、温かな言葉の使い手になる。	日常生活の全て 学校・家庭	役割演技の体験をしてみることであらためて言葉によって心の状態が変わることを学んだ。その後の生活場面で「あっ、今のは、チクチクことばだよ。」と互いに注意し合える場面が出てきて反省が見られ、優しさが見られる。
		＜いーれて＞ 遊びの場面での「仲間にいれて。」の声があった時の「いいよ。」「えっ」の場面を、５人グループでそれぞれをみんなが体験する。	グルーピングのあらゆる場面において	「いーれて」の時にいやな顔をされたときの体験は、強烈であり、「いいよって言ってあげようと思う。」の振り返りができた。実際の休み時間において「入れてもらえなかった。」ということがあり、その時にこのトレーニングを思い出して振り返り、反省ができた。
		＜パチパチカード＞ 友達の言動について賞賛の言葉をカードに書いて言葉のプレゼントを行う。	生活科校外学習「水道山・桐生が岡動物園」	１・２年生の生活科校外学習が終わって振り返りの場面で、教師が見取れなかった児童の様子を多く知ることができた。友達同士の相互評価がカードになり、ほめてもらえて自信につながり有効であった。いろんな活動の振り返りに用いることができる。

ウ　１・２年生の生活科校外学習（10／25）を成功させよう。
異学年交流の一環としての学習である。里の子班を利用して班編成を行い、２年生の目標を明確にして、１年生に対してできることを考えて活動に取り組ませた。以下は、その計画、実践、見取りである。

表２　1･2年生の生活科校外学習における指導計画･実践･見取り

<table>
<tr><th></th><th>学習活動</th><th>活動への支援</th></tr>
<tr><td rowspan="2">事前</td><td>・これまでの里の子活動を振り返り、うれしかったことを思い出し、１年生にしてあげられることを考える。
・自分の目標を立てる。（１時間）</td><td>・これまでの異学年交流や日常生活を振り返り、お世話をしてもらってうれしかったことを思い浮かべさせ、上級生としてできることを考えられるようにする。</td></tr>
<tr><td>・里の子班（１・２年生縦割り 12 班８名）のメンバーのお友だちと仲良くなる。
・話し合いでリーダー、係を決め、見学の計画を立てる。（２時間）</td><td>・８名のメンバーの話し合いがスムースにいくように支援する。
・リーダーを中心に２年生が１年生を引っ張っていけるようなアドバイスをする。</td></tr>
<tr><td>見取り</td><td colspan="2">・しおりに書き込めない１年生がいると、優しく教えている様子が見られた。
・見学の順番を決めるときに、１・２年生全員の意見を取り入れるために、挙手をさせながら、リーダーが進めていた班も多かった。
・見学の並び順では、リーダーを先頭に１年生を前にしてあげたり、１・２年生が交互になるように考えているところも見られた。
・２年生としてのリーダーシップを発揮できている児童の姿が見られた。１年間の成長の差は、大きいことを実感する。</td></tr>
<tr><td>当日</td><td>・里の子班ごとに水道山登り・桐生が岡動物園の見学を行う。
・リーダーを中心に計画に従って行動する。
・２年生は、係の仕事をしっかり行い、１年生をリードする。</td><td>・見学の際は、チェックポイントを通過しながら、班のメンバーで仲良く見学できるように支援する。
・困ったことが発生した場合の行動について確認をしておく。
・２年生は、係の仕事をしっかりして、１年生をリードしてあげられるように意欲を持たせる。</td></tr>
<tr><td>見取り</td><td colspan="2">・一日、トラブルもなく、水道山の山登り、桐生が岡動物園の見学を里の子班でリーダーを中心に行うことができた。
・トラブルがなかったことに驚く。
・１年生が担任の先生に尋ねたり、相談に来たりということが全くなかったのは、２年生のリーダーシップ、協力のおかげと思う。</td></tr>
<tr><td>事後</td><td>・自分の目標の振り返りをする。
・２年生は、友達のがんばりに拍手するパチパチカードを書き、お互いを認め合う。
・１年生は、２年生にお礼のカードを書く。（１時間）</td><td>・自分の目標を振り返り、２年生として自分のできることをやったかを振り返られ、次の活動へつなげられるようにする。
・１年生の「ありがとうカード」をもらうことで、自分の存在を認められ、うれしい思いを体験し、次の活動へつなげたい。</td></tr>
<tr><td>見取り</td><td colspan="2">・１年生の振り返りから、２年生に助けてもらっていることがたくさん分かった。
・２年生の振り返りから、１年生のことをいつも考えながら、行動していたことが分かった。（トイレの時間やメンバーの人数の確認等）
・１年生から「ありがとうカード」をもらったことにより、認められたうれしさ、役割を果たせた喜びの様子が見られた。また、次の異学年交流への意欲付けができた。</td></tr>
</table>

(2)　情報発信・受信の場

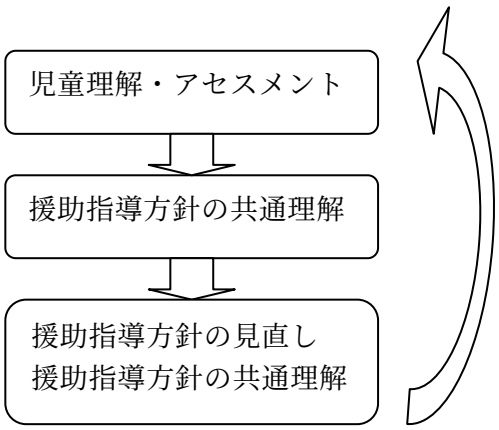
ア　「ほっとルーム」だより…職員へ

「ほっとルーム」についての共通理解や温かな人間関係の育成についての情報交換を行う場として設定する。

イ　「清里小だより」（学校通信）
　「オンリーワン」（学級通信）…保護者へ
「ほっとルーム」開設、学校・学級での温かな人間関係づくりの実践などを提供した。
ウ　異学年交流におけるふれあい
異学年交流での心のふれあいをカードを通して、発信したり受信したりした。
○　「ありがとうの花束」
○　「ありがとうカード」
○　「パチパチカード」…上級生へ・友だちへ

資料2　清里小だより

(3)　援助・指導の場
気になる児童についてのチーム援助会議を月に１回程度行った。（校長、教頭、担任、養護教諭、教育相談主任、生徒指導主任が出席）



資料3　ほっとルーム

Ⅳ　まとめと今後の課題

本校の「ほっとルーム」機能に、不登校を未然に防ぐための温かな人間関係づくりの場を設けた。一人一人が自己肯定感をもち、自分らしさを発揮し、人との出会いの中で様々なふれあいを通して、認め合い、互いに支え合える人間関係を育むために、本校の特色である異学年交流「里の子活動」を見直すことを行った。始めに活動ありきではなく、異学年交流のよさ、ねらいを理解させ、児童一人一人に目標をもたせ、振り返りをさせることを職員で共通理解し、実践にあたった。この結果、一人一人が自分の目標に向かって活動し、異学年交流のねらいに迫ることができた。活動の振り返りを行うことで、自分や友だちのよさを見つけたり、協力することの大切さを実感し、次の活動に生かすことができたり、評価にも役立てることができた。楽しく活動させてもらった下級生が、お世話をしてくれた上級生へ「ありがとうの花束」で感謝の気持ちを表すと、受け取ってくれた上級生の誇らしげな、うれしそうな表情を見ることができた。感謝されることの充実感、自己肯定感を味わわせることができ、次への活動の意欲をもたせることができた。
１・２年生の校外学習においても、２年生は上級生として行動することができた。里の子ゲーム大会では、感謝の気持ちをもち、校外学習では、世話をすることができた満足感がみられ、次の「遊びの国へようこそ」の学習に期待を膨らませた。そして、２年生同士で友だちのがん

ばりに「パチパチカード」を送ったことで、互いのよさを認め合うことができ、温かな人間関係づくりができたように思う。

「ほっとルーム」の機能を生かした「里の子活動」において、友だちのよさ、がんばりの情報を「カード」を用いて発信・受信したことは、大きな自信をもたせることができて、自己肯定感をもたせるのに非常に効果があった。学年の枠を超え、優しい声をかけ合う姿や支え合う姿を見取ることができた。児童の実態を把握し、活動における指導方針を立て、トレーニングによって、知識や技能を身につけた上で実践につなげ、評価を行うという一連の活動の流れを大事に扱ったことが有効に働いたと思われる。

今後の課題は、このようなサイクルを常に行いながら、不登校を未然に防ぎ互いに支え合える温かな人間関係を、今後も築いていけるよう職員で研修を積みながら指導にあたることが大切であると考える。

＜主な参考文献＞

・滝　充　編著「ピア・サポートではじめる学校づくり　小学校編」　　金子書房（2001）
・國分康孝監修「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる」　　図書文化（1999）
・國分康孝監修「エンカウンターで学級が変わる　小学校編」　　図書文化（1997）